徒然つれづれ

遍路の宿

八坂　里四

四月半ばに高野山を訪れ、伊丹発の午後の便に乗り、遍路旅を終えた。四十日の旅だった。『八十日間世界一周』から考えると、世界の半分を回った日数であり、ぜいたくな旅と言える。

千キロを超える道を歩いたこともそうだが、帰宅してしばらく経ち、妙に感心したのは毎日宿が変わったことに何の不自由を感じなかったことである。

最後の札所八十八番大窪寺を打ち終えた三十九日目は大阪にホテルをとったが、四国での三十八泊は遍路宿と言われる民宿に多くの日を泊まった。民宿の他、旅館、ビジネスホテル、国民宿舎に泊まり、宿坊も利用した。

三月から四国を歩こうと決め、準備を始めると楽しみや期待が湧いてくるが、心配や不安も出てくる。行程に余裕を持つため七週間で歩いた夫婦の紀行文を参考に計画を立てた。

歩き遍路が重宝するへんろみち保存協力会の『四国遍路ひとり歩き同行二人』と『別冊』の地図は取り寄せてあった。遍路宿の情報が豊富に載っており、遍路宿の廃業を知らせる小片もはさまれている。歩き遍路は春と秋に集中して、遍路宿の通年営業にはむずかしさがあり、後継者の問題もあるようだ。

泊まる宿は『別冊』の宿泊施設一覧から候補を決めた。多くの人が紀行文に印象的に書かれている民宿は、できるだけ組み込むようにした。

出発十日前に、遍路旅前夜を鳴門市のホテルに予約を済ませると、いよいよ遍路に行くという実感が湧いてきた。数日して初日の安楽寺宿坊を手始めに七泊の宿を予約した。歩き始めは歩くだけで精一杯で宿の手配までの余裕はないので、事前の予約が良いとのアドヴァイスに従った。

この期間は、徳島の二十三札所を歩くのだが、今回は徳島だけという区切り打ちの人と一緒になる日が多かった。彼らは一週間から十日の予定で来ている。宿の予約も楽しむつもりか宿を決めてこなかった人も多かった。春は歩き遍路がもっとも多く、当日では予定の宿を確保できずに困惑

している人もいて事前に予約してきて正解であった。

それでも三日目最初の難所といわれる十二番焼山寺を終え予約していた神山温泉の民宿の玄関先で声を掛けても人の気配がなく、少し不安になるほど時間が経ってからお婆さんが出てきて、「取り仕切っている嫁が風邪なので、よそを紹介するから」と断られて不安な思いもした。

出掛ける前に予約してきた宿が七日目の薬王寺宿坊で終わると、その後は毎日宿の手配をすることになる。

遍路の一日は、天気に関係なく七時には宿を発ち、夕方に宿に入るのが普通である。宿に着き洗濯を済ませ風呂に入り、夕食までの間に翌日の行程を確認する。疲れ具合、天気を考え、札所や宿への距離を計算して宿が決まればその日に、決められない時は当日の午前中の早い時間に予約した。夕食時に宿の人に次の宿の情報を教えてもらい、同宿の遍路の予定も参考にした。

薬王寺を打ち終えると、今回は高知を区切り打ちする遍路と通し打ちの遍路だけになる。徳島では、徳島一県を区切り打ちする初めての遍路が多いので、「どちらから」の問いは福島とか神奈川とか、住んでいる町を聞かれているのだが、高知に入ると、「どちらから」の問いは前夜の宿はどこだったかという問いに変わっている。「どこまで」へは、何番まで行ってどこの宿に泊まるかを答えることになる。

徳島を歩いている間に、歩くことに慣れることにし、遍路の作法も身に付けるよう心掛けた。宿に着くとまず金剛杖を洗うのも忘れずした。だが、肝心の金剛杖を宿に置き忘れた朝もあった。その後は朝のチェックを念入りにした。

弘法大師の尊称である「南無大師遍照金剛」の宝号を唱えて歩くこともした。早朝、山中や海岸の、人気のない道を大声で唱えながら歩くと邪気払いにもなると『四国遍路ひとり歩き同行二人』に書かれている。

宿を出て遍路道の道筋に入ったと確信できると、「南無大師遍照金剛」を唱えていたが、そのうち物足りない気がし始めた。「南無大師遍照金剛」を唱えてから、それまで泊まった宿の名前を言ってみることにした。「三月八日安楽寺宿坊、三月九日鴨島町ビジネスホテル双葉、三月十日神山町民宿明日香、三月十一日徳島市ビジネスホテル近藤」、といった具合に宿の名前を言ってみた。日中も時折声に出してみた。

こうして「南無大師遍照金剛」だけでなく、宿の名前を毎朝唱えて覚えると、その日までのことが蘇えってくるし、同宿の遍路の人と話をしても宿の名前を聞くとすぐに日にちと場所を思い出せた。そして歩きのリズムをスムーズにしてくれたようにも思う。

泊まった宿それぞれに思い出がある。珍しい屋号の民宿もあった。足摺岬から戻って泊まった民宿の屋号は「民宿安宿」で、「あんしゅく」と読む。教えてもらうまでは「やすやど」と読むのだと思っていた。「やすやど」ではないので料金は他の民宿と同じであった。

民宿安宿の翌日、高知最後の札所三十九番延光寺近くで泊まった民宿の屋号は「へ

徒然 つれづれ

んくつ屋」であった。玄関先に手作りの蛙などの置物があり、屋号からの先入観もあったが、出てきた主人は屋号のとおり少々変わっていると思われた。岩風呂ふうにこしらえた風呂には玄関先よりも多くの蛙がいた。

偏屈で思い出す人がいる。民宿安宿で、全行程の宿を予約してきたという人と一緒になった。彼も余裕を持って計画を立てたようで毎日楽々と歩き、宿にも早いうちに着いているようだ。それでいて行程を変えるつもりはなく、計画どおりこれからも歩くという。偏屈でも頑固でもないのだろうが、いろいろな人がいるものだと思った。

立江寺の宿坊に泊まった日は大広間に相部屋でそれはそれで楽しかったし、遍路は相部屋をいやがってはいけないのだが、やはり一人部屋がゆっくりと休める。多く利用した民宿は、朝夕の食事は皆一緒にとる。宿の人や遍路たちと話もはずむ。次の宿やルートの情報なども得られるが、たまには一人で食事をしたいと思うようになる。

ビジネスホテルがある町では、ビジネスホテルを利用した。近くには大概コンビニがあり、そこで夕食と朝食を調達する。ヨーグルトも忘れずに買った。自分の時間でゆっくりと食事ができるのがうれしかった。歩き遍路にとって一番の関心事は、寝る、食べる、排泄の三つと言われる。ホテルでは風呂はもちろんトイレも何の気兼ねもなく使えるのがありがたかった。風呂に入りながら洗濯も済ませる。エアコンで翌朝にはカラッと乾いている。一日中雨の中を歩き靴もすっかり濡れた日の宿も大洲市のビジネスホテルで、新聞紙を中に詰めておくだけで十分であった。朝も用意ができ次第発つことができた。

時折、ビジネスホテルを利用してひと晩一人の自由な時間を過ごし、行程に程よいリズムを得た。

いずれの宿でもそれぞれ良し悪しがあったが、どの宿でも遍路への温かい思いやりを感じた。毎日各地の宿に世話になり、放浪詩人の気分をひと月余り味わっていたのである。